

2019年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会 岐阜県教育委員会賞

権利と自由の境界線

垂井町立不破中学校3年 矢橋 峻

名古屋の地下鉄矢場町駅に来ると、決まってぼくはある光景を思い出す。それは、祖母とデパートへ行った帰りの様子だ。

用事を済ませて帰ろうとデパートから地下鉄の通用口へ通じるドアを開けようとした時だった。向かいからやって来た初老の男性が先にドアへたどり着き、ぼくらが通過するのを待つように重いガラス扉を開けていた。祖母が無言でその前を通過した時、

「ありがとうは？」

と、怒った調子で男性が言った。祖母は

「開けてくれとは頼んでない」

と、男性に告げた。短かったが毅然とした祖母の口調に男性がひるんでいる間にぼくたちはドアを通り抜けた。時間にしたらほんの数秒の出来事だったが、ぼくはいつまでもドキドキが止まらなかった。

「ねえ、なんであんな事言うの。お礼を言うぐらい簡単でしょ。」

ぼくは祖母に聞いた。

「でも実際頼んでないでしょ。嘘は言っていないよ。ああいうのは親切の押し売りっていうの。目がよく見えないから、ばあちゃんは自分のペースで歩きたい。待たれていても困る。」

この言葉を聞いて、ぼくはハッとした。

祖母は視野が狭く、日常生活にも支障がある。身体障害者手帳を所持していて、メガネも遮光用の特殊なものだ。メガネに色がついているが、その他の部分で身障者と明確に分かる外見はない。それが逆にあだとなり、外で人にぶつかったり、知り合いに会っても分からず素通りして、誤解を招くこともある。視覚障害者が持つ白杖を持ったら？と提案した事もあったが、「人に障害をアピールするのは嫌」と即座に却下されてしまった。

祖母は続けてこう言った。

「障害者だからってあれがしたい、これがしたい、自由を奪うな、権利を守れって何でもかんでも声をあげるの、どうかと思う。峻だって欲しいものすべてが手に入るわけじゃないよね。ばあちゃんは、ない物ねだりと親切の押しつけは嫌い」

極端な論法かもしれないが、祖母が言わんとしている事は分かる気がした。

ハンディがある人たちが声を上げないと何を不自由と感じているかはわからない事は多くある。しかし、

そのすべてを解決したとしても、その人たちのハンディがなくなるわけではない。一つの事象が解決すれば、また次の問題が気になり、それが解決されても、またまた次の問題へときりがない状況が続く。解決を導く側にしても、親切にしている自分はかっこいいとか、この人に親切にしておくと後で見返りがあるかもなど、ゆがんだ打算が働く場合がある。でも、そうした欲を持ちながら生きているのが人間ではないだろうか。

「人の手は二本あるけど、両手で欲しいものを抱えてしまったら、困ったひとに差し出す手はなくなっちゃう。それどころか、自分がつまづいた時にどうするの。手がつけなくてケガをするよ。何事もほどほどにしないとね。こういうのを〈足るを知る〉と言うんだよ。」

黙って歩くぼくに祖母は言った。

「ぼくは今日、何もねだらなかつた。片手があいているぼくが誘導するから、ここからは大人しく従ってね」

差し出したぼくの右手を祖母は笑って握ってくれた。

ぼくは、考えた。権利、権利と声高にさげび、無理をおしとおしても、自分の権利を確保する人、一方で、祖母のように、自分をみつめ、自分の出来る事は、人手を借りずに自分でする。それは、はたから見ていると、とても時間がかかり、またとても大変な事に思うのだが、なんとか、自分でなしとげる。

どちらもその人の権利だが……。

ぼくは、これから困っている人、困っているのではないかと思った人には手を貸そうと思う。しかし、その前に何をしたら、どう手を貸したら良いか聞く事にしよう。

その人の権利を尊重し、またその人が望んでいる手の貸し方をしたいと心の中で決めた。